第１回　北海道教育推進会議高等学校専門部会　議事録

１　日時

平成２８年１２月２１日（水）１４時～１５時３０分

２　場所

北海道庁別館９階　第３研修室

３　議事

（１）高等学校専門部会の設置について

（２）「新たな高校教育に関する指針」検証結果報告書について

（３）高校教育に関する意向調査について

（４）高等学校専門部会の審議内容について

（５）今後のスケジュール（案）について

４　配付資料

資料１　　「北海道教育推進会議条例」

資料２－１「新たな高校教育に関する指針」（概要版）

資料２－２「新たな高校教育に関する指針」検証結果報告書（概要版）

資料３－１「高校教育に関する意向調査」実施要領

資料３－２「高校教育に関する意向調査」質問用紙（中学生の保護者用）

資料４　　「北海道教育推進会議高等学校専門部会における審議について」

資料５　　「今後のスケジュール（案）」

※「北海道の新しい高校づくり２０１６」を参考として配付

５　出席者

○北海道教育推進会議高等学校専門部会

青柳委員、石田委員、犬嶋委員、蝦名委員、北村委員、工藤委員、佐藤委員、篠原委員、星野委員、山崎委員、山本委員、山谷委員

●事務局

教育部長、新しい高校づくり推進室長、教育政策課、新しい高校づくり推進室

議事（１）高等学校専門部会の設置について

事務局から、資料１により説明

（意見なし）

議事（２）「新たな高校教育に関する指針」検証結果報告書について
事務局から、資料２－１及び資料２－２により説明

（委員）
○　第４章の「検証結果の対応方向」について、２段目で「第二章の項目については、北海道教育推進計画に委ねる」ということですが、この場ではこの部分はあまり具体的には議論をしないで、主に第３章を中心に議論がされるという考え方でしょうか。

（事務局）
●　後ほどの説明と若干重複いたしますが、検証結果報告書概要版の第４章にあります、「活力と魅力のある高校づくり」「経済社会の発展に寄与する人材を育む高校づくり」「地域と繋がる高校づくり」、この３つの視点につきまして検討していくこととしており、これらは、ご指摘いただいたとおり、第３章の項目を整理した視点になっています。

（委員）
○　第３章の第１節で、学校規模及び学級定員等について、１学年４～８学級が望ましい学校規模としてきたのが10年前に策定した指針だと思いますが、今後は地域の実情等に応じた検討を行うということと、標準法の改正を国に要望していくということと、２つお示し頂いています。地域の実情等に応じた検討というのは、何か既にもう少し詳細な話を検討されているのかどうか、もしお答えできそうでしたら、ぜひお聞かせ頂きたい。

（事務局）
●　今回検証した現行の指針では、「４～８学級を望ましい規模とする」、ということは１～３学級の学校をどうしていくのかということについて、記載もございます。「地域の中学校卒業者数の減少の状況に応じ、再編整備を進めます」との記載もあり、その考え方に基づいて再編統合や小規模校の募集停止なども行ってきたところがあります。方向性というのは、そのような小規模校への対応なども、この後どうすべきか検討していかなければいけない、という考え方も含んでいます。

（委員）
○　４～８学級というのが、なかなか北海道の実態には合わないなと感想を持っていたものですから、詳細をお聞かせ頂いたところでした。ありがとうございます。

議事（３）　高校教育に関する意向調査について
事務局から、資料３－１及び資料３－２により説明

（委員）

○　実はうちの学校、このアンケートが当たりまして、先日提出したところです。前回、10年前も実施されたということですが、うちのような郡部の中学校の子どもや保護者は、地元の高校しかないので、高校の選択肢がありません。そうすると、通わせる学校の選択肢がたくさんある都市部と、郡部との違いというのを、10年前はどのように分析したのかをお聞きしたいです。一緒にしてしまうと、ちょっと違うんじゃないかなと思います。選択肢がたくさんある地域とそうでないところを分けた分析を、もしされていないのであれば、ぜひそのような分析も検討して頂けたらと思っています。

（事務局）

●　今回、この調査の集計を行うに当たり、都市部と郡部、人口の規模、通学区域の学校が選べる数によっての違いを、いわゆるクロス集計という形で、分析したいと思っています。10年前も一部クロス集計している部分もありまして、今回の調査と合致している部分と、細かい部分で違うところもありますが、共通する部分についてはそのような集計を考えています。

（委員）

○　今、私もぴんときたのが、先生がおっしゃったような地域の格差の問題。今回の調査は問９問10、この辺りが新しく入れた項目ということで、他は10年前の調査とほとんどが同じです。前回のアンケートの結果というのは、次回の会議で拝見できるのでしょうか。

　それと今回のアンケートとの比較は、これからの指針を作るに当たり、保護者がどう考えているかということですが、私が保護者だとして、質問が来たときに、やはりお子さんと一緒に考えるのではないでしょうか。保護者としての考え方、というのがアンケートの本来の目的なのでしょうが、項目をすっと見た感じで、なかなか保護者の方で、子どもをどうしていくか、子どもの意見も聞きながら回答するのではないか、ということを思いました。

（事務局）

●　調査の進め方ですけれども、調査対象となった学校では生徒に対してアンケートを行うことに併せて、保護者へのアンケートも依頼しており、生徒と保護者がセットになっていることも考えられます。家庭ではお子さんが、学校でこういうことをやってきたよという話をするかもしれません。生徒については、学校で回答して学校で回収すると思うんですけれども、保護者用のアンケートのやり方としては家庭の中で相談しながら回答している場合もあるかもしれません。

（委員）

○　私も項目はまだよく分かりませんけれども、おそらく家庭によっては、高校進学というのは、次のステップである大学の進学までかなり影響する問題だと思います。親との会話というのが、指針でも人材育成の点でも大きなポイントを握る部分であると、感じたものですから。

（委員）

○　今の部分、付け加えさせていただいてもよろしいでしょうか。平成18年の指針の最後に、概要版として10年前の調査の結果が載っていますが、概要ということで、大まかにはつかめるのかもしれないのですが、省略している部分もありますよね。

（事務局）

●　今日の配付資料にはありませんが、各委員のご自宅に事前送付しました「新たな高校教育に関する指針」の資料の最後のところにあります。今回のアンケートについては、前回の結果との比較とのセットで検討していきたいと思っており、次回までに準備してまいります。

（委員）

○　なかなか資料づくりも大変になると思うのですが、ぜひ見やすくなるとありがたいと思います。よろしくお願いいたします。

（委員）

○　先ほど他の委員からも話があったとおり、地域によって様々な考え方があるのかなと思います。中学から高校の接続の部分で、高校入試が占める割合が非常に大きいのかなと思いますし、保護者の考え方については、この部会が参考にしなければならない部分が非常に多いのかなと思っています。アンケート調査は今月末回答ということで、クロス集計の部分については、ぜひお知らせ頂ければ、大変ありがたい資料になると思い、お話をさせていただきました。

（委員）

○　生徒と保護者へのいくつかのアンケートという形になっていて、これは結果を見てみないと分かりませんし、質問内容も資料として保護者用が添付されていますが、生徒自身と保護者では大分ずれが出てきたり、考え方が違う部分が出てきたりということは当然予想されます。その当たりの分析の方向性についてはお考えがあるのでしょうか。10年前はどうだったのでしょうか。

（事務局）

●　同じ質問でも、それに対して肯定的な回答が保護者は60％だけども、生徒が40％であるというような、棒グラフで示した比較を前回は行っております。

（委員）

○　例えば、地域毎にも分かる形になっているとより分かりやすい。

（事務局）

●　そのような形でも分析可能です。

（委員）

○　環境の違う地域で同じ調査をやって、ひとつにまとめてしまうことはあまり意味がない気もするので、そういったところも示して頂くと参考になるのかなと思います。

（委員）

○　私は、平成16年に総合学科になりました斜里高校の出身です。娘は石狩翔陽高校で総合学科を卒業したんですが、下の子は高校２年生で全日制の普通科におります。資料に目を通していたときに、このアンケート自体は見ていないんですけれども、学校に入学したときにそれぞれ総合学科と普通科の学校で、どうしてうちの学校を選びましたかというアンケートがありました。特に総合学科の石狩翔陽高校は細かいアンケートが出ていて、そこの分析をしようと思っているのだと感じました。保護者にも、どうしてうちの学校を選んだのか、ということがアンケート項目にありましたので、その結果がどういうふうに活用されるかは分かりませんけれども、有効に活用してくれたらなと思っています。

今回、実家の方に連絡をしまして、今斜里高校がどうなっているのだろう、ということを聞いてみました。残念なことですが、中学校の校長先生が仰っていたように、私の実家の方も地域の高校が近く、他の高校が遠いので、私たち50代の世代は斜里高校にと行っていました。しかし、現在は斜里高校が総合学科になっていて、将来のことを見据えたら、物足りないといいますか、保護者はみんな頑張って網走や北見など、遠くの学校に進学させています。私たちのときには定期代もとてもかかりました。今、斜里町で援助をして、40キロ離れた斜里町のウトロから通学しても定期代がかかりません。総合学科としての魅力をもっと生かせないのかなという話をされました。せっかくここの場で関わったので、色々なところで良く回っていけばいいのではと思い発言させていただきました。

（委員）

○　今のお話ですと、石狩翔陽高校でも保護者向けのアンケートを採られていて、その集計

もかなり細かくされていて、学校個別にたくさんやられているだろうという。それが今、事務局の方でどの程度生かされるかという質問も含まれているのかなと思ったのですけれども。学校個別に集められているアンケートや調査が、今回の指針のところにまで生かされるか、というところでしょうか。

（委員）

○　もしかしたら学校で収まっていて、ここに上げるようなものではないのではないかなと思うんですけど、だいたいこのような、どうしてうちの学校を選んだ、というような内容でした。

（事務局）

●　昨年の６月に在校生を対象に、また平成23年度には卒業生に対して、新しいタイプの学校について調査をしていますので、その結果も必要に応じて提供申し上げたいと思います。

　それとは別に、各高校では、学校の自己評価、学校評価の一環として、保護者アンケートを行い、その結果については、概要版を学校ホームページに掲載したり、学校だよりで返したりしているところです。ひょっとしたら、保護者の方は年３回くらいアンケートに答えている場合もあるかもしれません。

議事（４）　高等学校専門部会の審査内容について

事務局から、資料４により説明

（委員）

○　今の説明の中で、資料３の「審議の具体的な内容」の最初ですが、「活力と魅力のある高校づくりについて」というところで、学校規模のことが出ていまして、１学年４～８学級というのは今までと変わらないと思いますが、それを基本としつつという前提でいうと、これ以下のことについてはとりあえずは除いて、ということですか。その辺りも当然出てくる話かなと思いますが。

（事務局）

●　学校規模についての基本的な考え方については、一つ目の丸の「活力と魅力ある高校づくり」というところで検討するんですが、三つ目の丸の地域とつながる高校づくりでは、３学級以下の小規模校と言われる学校の教育活動をどのように充実させるかという視点、教育の内容の充実の視点と、何間口という学校規模との関係性を丁寧に検討したいと考えています。

（委員）

○　今回の審議は、様々な職種の方々が参加しております。私はこの審議の具体的な内容のうち、１つ目についてはプロではありませんが、２つ目の発展に寄与する人材、３つ目の地域と繋がる高校づくりという形の中で、具体的にいいますと再編基準の緩和に向けた具体的人数要件を検討する、という部分については、前回もこのような形であったと思います。ざっくばらんに言いまして、私たちが専門部会で出した答申を、次の推進会議で検討するということですけれども、極端に言うとここで出したものが100％そこで承認されるものなのか。前回の例でいいのですが、それともそれについてはちょっと厳しい、ということになるのですか。

（事務局）

●　前回の指針を策定した際には、検討組織に答申を頂いて、その答申を踏まえて道教委が進めていきました。今回は答申という形はとらず、度々の会議の中で、こんな風に作りたいと思うがいかがですか、とご意見をいただき、その意見を踏まえながら進めるという形です。

（委員）

○　そうすると、その度毎に私たちに案が出されて、推進会議の中で検討を進めていくということですね。なぜそんな話をしたかというと、我々のような小さな町は、高校のあるなしによって、コミュニティへの影響が大きく、また小中学校であれば必ず義務教育で入るわけでありますが、子どもを高校に入れるために、先ほどの斜里のように何十キロも離れたという話になると、親の負担が相当大きいということもあります。私は町村長として代表で入ったものですから、そこの部分は十二分に、私たちの意見をなんとか反映していただきたいという思いを込めて今、質問いたしました。

（委員）

○　今、町長さんがおっしゃったとおり、私も教育推進委員を２年やってまいりまして、私が考えていた学校と、今の小中学校を比較してこれだけ変化があるのか、というのは正直なところ驚きました。コミュニティスクールなど、非常に良い制度が作られている一方で、人口減少で地域キャンパス校がこの数だけあるのかと。さっき10年前には４～８学級というところ、それが今は学区によっては３学級が一番大きな学校の単位だと、これもまたひとつ驚いています。私はこの３つの審議内容はもちろんだと思いますが、その背景にある、一番考えていかなければならない部分というのは教育環境であり、今、町長さんもそこをおっしゃったんだと思います。教育環境を常に背景に見ながら議論をしていく、審議をしていくことがやっぱり一番大事ではないかと、私もこの専門部会の委員に仰せつかって、つくづく思ったところです。

議事（５）　今後のスケジュール（案）について
事務局から、資料５により説明

（委員）

○　この会議は毎回２～３時間くらいですか。私ですね、今回15人のまったく職種が違う方々が集まっています。そうすると、学校の先生方は、自分の生徒が社会人としてどうなっているかをあまり知らないと思います。私たちはそういう生徒を地域で見ており、また私の町の職員でも来ています。そうすると、私の持論では、はっきり言いまして、社会人にとって学歴はまったく関係ないと思っています。そういう中で、堅苦しい会議ばかりやってもどうなんでしょう。３時間で誰かが２～３回話して終わるのでなく、１回くらい懇親しながら、自由に意見を交わす場があっても良いと思います。今私たちは、町づくりは人づくりであり、根幹は教育であると考えていて、これからの地方創生の中で、20年後に町がなくなるという危機の中、そういった課題に耐えられる子ども、社会人として地域をつくる子どもをいかに育てるかというのは喫緊の課題です。

そういう意味で、一回ぐらい胸襟を開いて、ざっくばらんに教育ってなんだということを話をするような、そういう場があればと思います。地域の実情、町を残すにはどうするか、本当の教育の必要性というのは私も当然一番感じていますから、そこの部分を事務局の方で検討していただければありがたいなと、よろしくお願いします。

（事務局）

●　みなさまのご都合を伺いながら、検討していきたいと思います。

（委員）

○　さっき私が申し上げた部分で、できれば今後何回かの会議の中で、地域キャンパス校のこれからの人員予想について、人口移動等がありますから正確な数字は出ないと思いますが、おそらくお考えになって配置関係の担当はお出しになっていると思います。それから、これからの10年へ、大きな不安がありますので、新たに地域キャンパス校が導入されそうな道立高校のデータなども、いつかの機会にお出しいただければなと思った次第です。

（事務局）

●　どういったお示し方ができるか、という部分はありますけれども、お示ししながら議論いただきたいと考えております。

（委員）

○　遡る形で申し訳ないですが、この検証結果報告書の２ページ目で、新しいタイプの学校の拡大と普通科の特色づくりということで、成果検証をされていらっしゃいますけれども、この中でフィールド制の学校の満足度が他校に比べて10ポイントくらい低いんですけれども、これはどういった理由からと捉えていらっしゃるか伺ってもよろしいでしょうか。

（事務局）

●　平成18年の指針の中で、普通科の特色化として、フィールドとよぶ科目群、例えばナチュラルサイエンスフィールドや人文社会フィールドなど、科目のまとまりを作ったのですが、選択科目を十分置けなかった実態があります。生徒には「選択科目がたくさんある」ということでスタートしたのですが、教員配置の部分で色々と制約があったこともあり、実態としては十分に科目選択を保証する教育課程になりきれませんでした。今のところ普通科の特色づくりに結びついていないということで、やはりここは在り方の検討、どうやって魅力ある形に変えていくかというのは、次に新しい指針を作るときの課題であると、この数字から考えているところです。

（委員）

○　実際のところ、現在導入されている学校の取捨選択ということも、考えられるのですか。

（事務局）

●　フィールド制の説明はパンフレットの３ページで、比較して単位制とか総合学科との違いについては５ページの下の方にあります。まずは３ページを見てイメージを作りながら見てもらえればと思います。

　例えば総合学科で申し上げますと、学習する科目は普通科目と専門科目から科目を選択して学習しますというふうに、あまり細かいことは書いておりません。非常に広い、数も多いというとらえ方でいていただければよろしいかと思います。それに加えて、普通科フィールド制の場合は、国語や数学などの普通科目のほか、「福祉環境などの」ということで、選択幅が少し限られてきます。それは教員の配置数もあってですが、選択の内訳がちょっと狭いものですから、なかなかフィールド制の満足度が他に比べると低いのかなという認識、受け止めでございます。

（委員）

○　次回のときで結構なのですが、それを導入されたことで募集定員が増えたとか、志願者が増えたとか、そういうようなデータをお示しすることはできますか。

（事務局）

●　分かりました。

（委員）

○　私は小学校の校長でございます。小学校では、将来の職業や、自分がどのように社会の一員となっていくかについて調べたり考えたりする、キャリア教育が行われています。ですが、小学６年生は３年後、４年後に高校を選択する立場でありながら、例えば本校の小学校の保護者が、このように多様な道立高校の形態について選択をし、それが子どもの適性や興味関心に合ったものかを検討するような情報があるのだろうか、という点について考えました。

　私もこちらの資料をいただいて、また道教委の教育推進計画に目を通すことがあるので、少しなるほど、と思いますが、小学校の保護者に対する発信はどの程度、あるいはどのような形で行われているのかお伺いしたいと思います。

（事務局）

●　道教委では「ほっとネット」という広報誌を配布して、10月号の中で新しいタイプの学校の紹介記事を書かせていただきました。それでもまだ不足しているという声も聞きます。せめてＰＴＡの代表の方に少しでも理解をということで、高校の配置計画や新しいタイプの学校の導入などについて通学区域ごとに説明する地域別検討協議会の中で、今年度から小学校の地域のＰＴＡ会長や小学校の校長先生にもその会議に出ていただくように、参加招集範囲を広げました。さらには、ＰＴＡ分科会といって、本会議の前にＰＴＡ関係者を集めて、新しいタイプの学校の説明などを行う場面を設けるなど、少しずつ小学校の保護者やＰＴＡ、先生を意識した取組を今始めています。ほっとネットについては以前から載せていますが、色々な形でＰＲが必要だという認識です。

（委員）

○　私は札幌市立の小学校ですから、いわゆる普通科、それから総合学科など、学校の選択肢がたくさんありまして、あるいは開成中等教育学校へも、うちの６年生の98名の約10％が、近くではないが選択するという状況です。私どもの学校は570～80名の児童がいる、３クラス平均の都市部の住宅地の普通の小学校です。以前勤務した小学校も同じような地域で、近所に札幌西高校があったときに、地域での交流ということでは、スーパーサイエンスハイスクールをやっていて、実験教室を開催するときに小学校を誘っていただいたり、あるいは英語教育について、地域としてボランティアとして一緒に活動したりしていました。西高の校長先生が、「西高ではこういう教育をやっていますよ、これを小学校の参観日にチラシとして置かせてもらえないか」と。今少子化が進んで、いかに地域といえども、何か中身をちゃんと知ってもらわないと、選択してもらえないという現状があるんです、という話を聞きました。ですから、これだけ多様にあって、今色々なお話を

聞きますと、自分の地域の学校を活性化させたいが、じゃあそこにどういう魅力を持ったものにするか。子どもや親の側にすれば、地域を離れてでも選択したいと思える高校ということ、だとしたらそこを保証する通学や、登別明日中等教育学校のような寄宿舎、そういう部分についての情報を今いくつかお知らせいただいたんですけれども、これから必要になってくるのかなということも思った次第でございました。

（事務局）

● 様々な御意見をいただき、ありがとうございました。

資料の示し方などについて、いくつか御要望がありましたので、次回以降、準備しておきたいと考えます。

次回は平成29年の２月の開催を予定しておりますので、改めて日程の調整をさせていただきますので、よろしくお願いします。